第30期第２回仙台市図書館協議会会議録

◎　会議の日時・場所　　令和３年５月24日（月）14時30分～16時00分
　　仙台市役所本庁舎２階　第２委員会室

◎　出席委員の氏名　　遠藤仁委員、渡邊千恵子委員、跡部裕史委員、
　　小野寺利裕委員、小林直之委員、杉山秀子委員、
　　高橋由臣委員、滝川真智子委員、根岸一成委員、
　　堀多佳子委員、真壁直人委員、渡辺祥子委員

◎　事務局職員氏名　　市民図書館長　樋口千恵、市民図書館副館長　柴田聡史、
　　広瀬図書館長　菊池雅人、宮城野図書館長　岡本幸代、
　　榴岡図書館長　柴田雅子、若林図書館長　山口宏、
　　太白図書館長　内海明、泉図書館長　松島桂一、
　　市民図書館主幹兼奉仕整理係長　山田千恵美、
　　市民図書館企画運営係長　早坂江美子

◎　会　議　の　概　要

１　開　　会

２　挨　　拶

教育長挨拶
新委員就任挨拶
市民図書館長挨拶・事務局紹介
会長挨拶

３　会議録署名委員指名

会長より小林直之委員を指名。

４　報告事項

（１）令和３年度仙台市図書館運営方針・事業計画

（市民図書館副館長　報告）

資料１にもとづき報告

議　　長　　ただいまの報告に関して何かご質問ご意見等があれば出していただきたい。

小野寺利裕委員　　２ページ目の「４　事業計画」（１）２「窓口でのレファレンスサービスや事例集・ホームページによるレファレンス情報の提供」について、非常に大事な視点だと思うが、市民の方々はレファレンスについて知らない部分があると思う。広報の仕方で何かお考えになっている部分はあるか。

事　務　局　紙ベースの情報提供として、調べ方をテーマごとに事例的にお示しした「パスファインダー」を 41 種類つくっており、各図書館に配置している。これをホームページにも掲載するということを継続的に行っている。

小野寺利裕委員　このあたりもう少し力を入れていただきたい。

（２）２「障害のある子どもの状況に合ったサービスの提供」の中に、「障害のある子どもが利用しやすい環境づくり」「特別支援学校等への貸出資料の充実」とあるが、具体的にはどのように考えているか。

事　務　局　利用しやすい環境づくりとしては、各図書館に拡大読書器を設置している。また、資料としても、数は十分と言えないかもしれないが、点字図書や、布で立体的に作られた触って見られる絵本などを用意している。

小野寺利裕委員　具体的に、障害をお持ちのお子さんの保護者やご本人から、利用しやすい環境づくりについてのご要望などはあったのか。あれば聞かせていただきたい。

事　務　局　具体的なご要望としては伺っていないが、今年度は特に読書バリアフリー法を踏まえ、障害のある方々、特にお子さんを含めて施策を実施していく必要があると考えており、こうしたことにも力を入れている。

また、学校向けに本を貸出パックとして貸し出しており、その中には特別支援学校・特別支援学級専用資料もある。来館型のサービスはもちろん、図書館側が貸し出すという形で、アウトリーチ的にサービスを届けていくことにも力を入れているところである。

議　　長　レファレンスサービスについて、国立国会図書館のホームページでは、例えば「グリム童話」と検索すると、書籍情報のほかにレファレンス事例のようなものも一緒に引っかかってくる。レファレンス事例集だけ別の特定のページを作り、そこを探さなければならないと、面倒で利用されなくなるのではないか。国会図書館のような、検索すると書籍情報のほかに事例集も出てくるのは、非常に使い勝手はいいと思う。件数が多いと煩わしいが、そのあたりを工夫したらもっと利用価値は高まるのではないか。

事　務　局　レファレンスサービスで示した資料を見ると、本当に市民の方々の関心や課題意識は多岐にわたっており、それに効果的にお応えできるようなサービスを工夫していかなければならないと考えている。

堀多佳子委員　（２）４「学校との連携強化による子どもの読書活動の積極的推進」の中で、「小中高１年生向けの利用案内」というのがあるが、市民図書館の児童書コーナーに中高生からのおすすめの本というコーナーがあり、ちょっと見ただけでも読みたいなという書き方がされていてすごく魅力的だった。先生方に勧められるよりも、そのコーナーにあるおすすめの文章をちょっと読んだだけでもいいと思うのではないかと思う。利用案内に、その何人分かの文章だけでも工夫して掲載することで、本に対して興味が増すのではないかと思うので、検討していただきたい。

事　務　局　中高生においては読書離れということも言われるが、やはり中高生が読んで、お勧めの本を紹介していくということは、同世代の方々がそれを読んで関心を持つことに

もつながり、非常に効果的であると考えている。ホームページの「ＹＡ（ヤングアダルト）中高生のページ」にも載せているが、さらに工夫してまいりたい。

小林直之委員　（１）と（２）にあるイベントというのは基本的に対面開催を前提に考えているか。それともオンライン開催を視野に入れているか。

事　務　局　今年度については、対面で行っていくことを想定している。

小林直之委員　この１年でウェブセミナーが割と常識的になってきて、家にいながらいろいろなイベントに参加できるという利点に多くの人が気付いたと思う。。これからのイベントは、オンラインと併用、同時開催ということも少し視野に入れていく必要があるという印象を受けている。すぐにはなかなかできないと思うが、検討いただきたい。

事　務　局　今後検討してまいりたい。

根岸一成委員　（１）３、（３）１の電子書籍について、利用状況、特に臨時休館のときに増えたかなど、どんな感じなのか伺いたい。

事　務　局　電子書籍については今年度導入を検討している段階であり、まだ実施には至っていない。様々な他都市の事例なども踏まえ、どのようなやり方が仙台でのスタイルとしていいのかということを現在検討しているところである。

根岸一成委員　非常に興味のあるところで、宮城県としてもどうするかというジャッジも今後していかなければならないので、参考にしたいと思う。

議　　長　根岸委員にお尋ねしたい。宮城県図書館はまん延防止重点措置期間中も全然休館しなかった。先週のぞいてみたら、結構利用されていて、全く休館していないというのは驚いた。

根岸一成委員　仙台市と同様に休館するものと思っていたが、独自に決めることとなり閉館しなかった。来館状況については、すごく多い少ないということは特になく、大体平均的な感じであった。

議　　長　どこも閉まっている中にあって随分救われた。

杉山秀子委員　（３）２「障害者福祉関係機関等との連携構築」について、（２）２の障害のあるお子さんたちに対するサービスの提供と関わるところもあると思うが、具体的な構築はどう考えているか。

事　務　局　デイジー図書、デジタルアクセスの図書の取扱いについて、障害者総合センターの状況を聞くなど、情報提供をいただいたり情報交換をしたりというような関係が今のところは主である。発達障害のあるお子さんの相談機関であるアーチル（仙台市発達相談支援センター）などと連携した講座などを考えている。

杉山秀子委員　例えば県の視覚障害者情報センターのいろいろなデイジー図書などのやり取りもあるのか。

事　務　局　デイジー図書やマルチメディアデイジーは、サピエ図書館という全国的なネットワークがあるので、そちらを通じて利用している。

また、県の視覚障害者情報センターに講師を依頼して、講座を開いたこともある。

杉山秀子委員　いろいろネットワークがつながってくると、より利用者は利用しやすくなり、利用の幅が大きくなると思うので、ぜひ進めていただけたらと思う。

跡部裕史委員　（1）の5「大学図書館等との地域連携」の中で、「市民が利用できる大学図書館の紹介」があるが、結構あるのか。

また、蔵書を持つ専門施設、図書館と専門施設との連携というのは具体的にどういう施設でどのように連携していくのか。

事務局　大学図書館も、地域開放、地域連携を進めており、学生に限らず市民を受け入れているところが多いので、具体的な資料の照会や問い合わせがあった場合に、所蔵があれば手続などご案内することもある。

大学図書館との連携ということでは、宮城教育大学の図書館と協定を結び、資料の相互貸出を行いやすいような仕組みを整えている。

相互貸出等については、公共図書館や大学図書館との関係が主である。

議長　仙台文学館みたいなものも含まれるのか。

事務局　文学館の場合は貸出しではないが、そこに行けば閲覧も可能ということでご紹介できる。

小林直之委員　せんだい3.11メモリアル交流館の本は仙台市図書館で出していると記憶しているが。

事務局　市民図書館から閲覧用に提供している。

議長　ほかよろしいか。

各委員　特になし。

（2）令和3年度仙台市図書館予算概要について

（市民図書館副館長　報告）

資料2にもとづき報告

議長　ただいまの報告に対し、委員の皆様方からご質問なりご意見等はあるか。

各委員　特になし。

議長　特段何もなければ次の議題に進めさせていただく。

（3）令和2年度蔵書点検結果について

（市民図書館副館長　報告）

資料3にもとづき報告

議長　ただいまの報告に対してはいかがか。ICチップを利用して資料を感知するシステムを導入すると、このくらいの不明率に下がるのだろう。

事務局　一定の抑止効果は見込める。

渡邊千恵子委員　榴岡図書館の不明率がほかよりも若干高いが、何か理由があれば教えていただきたい。

事務局　確かに比べると率としては高めに出るが、対象点数自体が小さいので、特に多いとは受け止めてはいなかった。

議　　長　　ほかよろしいか。
各　委　員　　特になし。

５　協議事項

（１）次期仙台市図書館振興計画策定の考え方について
（２）新計画策定に向けた検討項目

（市民図書館副館長　説明）

資料４、５－（１）～（４）にもとづき説明

議　　長　　やはり数字も掲げなければならない時代になってくる。既にこういう方向性は前回の協議会でも示されたところである。事務局ではこのところ報告書なども同じような体裁で、取り上げたこと、課題となっていることなどまとめている。どこを今年度重点的に取り上げたのか、課題が残ったのかなど、その都度見えやすくしていく必要があるが、数値化とともに電子書籍など新しい事業も入ってくるので、今回いろいろなアイディアを委員の皆様から頂戴して、今後考えていく足がかりにしていきたい。

事務局と私で取り上げる項目やご意見の整理をさせていただくが、今日はその最初の段階なので、できるだけたくさん、いろいろなお立場からいろいろな切り口で、遠慮なくご発言いただきたい。

堀多佳子委員　　電子図書館導入について、非来館型の場合は、予約をすると、データがいっぱいあるから待たせずに貸出しという形になるのか。現在は 10 人待ち、100 人、300 人待ちもあるが、そういうことがなく、全員が読みたいときにすぐ読めるのか。

事　務　局　　同時に貸出しができる図書の数には制限があるので、人気のあるものについて順番待ちは生じてくるかと思う。

堀多佳子委員　　返却する前にダウンロードとかはできないのか。

事　務　局　　返却期限が来ると自動的に本が返却され端末に表示されなくなるシステムになっている。

堀多佳子委員　　よく本をインターネット上で買ったりするときに試し読みコーナーがあるが、２、３ページでも試し読みができると、非来館型で予約したり読んでみたいなと思えるのではないか。

事　務　局　　資料５－１「６．使い方のイメージ」に例としてお示ししたものにも、借りる前に試し読みできる実績があるようなので、それも検討したい。

議　　長　　非常に新しいサービスで、委員の皆様のご関心があると思う。私も読書は紙じゃないと駄目という主義だったが、実は今スマホに２冊電子書籍が入っていて、それがエッセイのような短い細切れの文章がたくさん集まっているもので、会議の直前とか細切れの時間に読めるような感じである。紙と競合するわけではないが、使い方にそれぞれ長所短所があるので、読書のスタイルが変わってくる気もする。

また、図書館で読書活動を推進するに当たっては、紙媒体とは違ったアプローチも考えられるのではないかと思うので、今回あるいは次回の委員会で委員の皆様からどんどんお出しいただきたい。

渡辺祥子委員　今回まん延防止等重点措置が取られたことで、仙台市内の社会教育施設、文化施設といった市民利用施設が一斉に閉じ、そのときに、これは危ないなと思った。というのは、今回わりと早い時期で再開したから良かったが、不急ではないけれども、時間が経つにつれてじわじわと心に効いてくるというか、生涯学習という観点から考えても、文化的な喜びという点からしても、こういう場がすっかり閉じるって結構怖いなと。去年はあまりそう感じなかったが、ほかの有料施設などは開いていただけに、今回特にこの市の施設の重要性を改めて感じた。

そういう意味で、今回のコロナを受けて、アフターコロナというか、改めて構築する図書館なりの意義とか、またその場が閉じられたときにいかにつながっていけるか。小林委員が言ったようにネットとの同時開催などを試みていくことで、ネットの世界にも開かれる高齢者なども増えていくような気がしており、電子図書館導入のときも、例えば市民センターと連携して地域の人たちに使い方を教えながらネット環境を整えて、講座をやるときもこうやるとできますよとか、電子図書の導入だけではなく、それをきっかけにしてもっと環境を整えていく。そうすると、コロナが落ち着いたとしても非常事態で市の施設が閉じることはいっぱいあるが、それでも高齢者の方、障害のあるお子さんをお持ちで動けないお母さん方、ネット弱者の方などにつながる何かが、電子書籍を広める過程でできるのではないかと思うので、導入する計画をしながらどう広めていくかということを考えていただけたらなと。これは私が危機だと思ったとき、一つの解決の糸口になるかと思った。

渡邊千恵子委員　連携はどこの組織でも大事だと言われているが、それができないのが今問題である。今のお話にあったように、電子書籍を広めていくということを図書館だけじゃなくいろいろな組織と共同でやることによって、それが百にも千にも広がっていくという可能性を秘めている。だから今、渡辺委員は大事なお話をされたと思っていた。

策定の考え方について、資料４の２ページ目にある「地域・市民に役立ち、共に成長を続ける図書館」、本当にこれがどう具現化できるのかということが大事なポイントだと思う。これからの私たちは、社会の課題解決を担う主体であるという認識をしっかり持ち、生涯学んでいく力というのがやはり大事なところで、それをサポートするのが図書館ではないか。

そのときに図書館は、もっと課題解決に向けた情報の提供や、その提供に終わらず、今年度の事業計画にもあったように、その情報や資源と人をつなげるワークショップのような、人と人をつなげる何かをしていくことが、これからの図書館の役割として期待されるのではないかと思う。新しい価値を創造していくことに寄与する図書館。

バリアフリーというのは水平で、どの図書館も整備しなければいけないこと。さらに新しい図書館としての役割というのがこの縦軸で、何か考えていく必要があるの

ではないか。

議　　長　確かに渡邊委員がおっしゃるように、例えば市民センターでヨガ教室をやっていたとしたら、その動画をアップして、書籍では体幹を鍛えるヨガがどんな内容になっているか抱き合わせにするなど、図書館側が機関と機関をつなぐ横糸を張るような役割をどこかでやらないといけない。機関と機関の付き合いとよく大学も言われるが、何か規約をつくって締結すれば済むことではなく、やれるところからやれる人がやらないと絶対できない。

例えば人的支援とかサービスの拡充とかいろいろ言われるが、やれるところから少しずつやって成果を上げていくしかない。この先何年も多分こういう状況とは付き合っていかなければならないと思うので、小林委員や渡辺委員のお話の中にもあったように、電子メディアを活用した図書館からの発信のようなものを強化していくといった方向性で、少し地盤固めをしていかなければならない時期なのだろう思う。

滝川真智子委員　小学生の子どもたちの視点で考えると、電子図書やオンラインのシステムと同時に、活字そのものの読書を楽しむという両方を育てたい。ＧＩＧＡスクールで１人１台端末を持つ時代なので、子どもたちがダイレクトに図書館の本をオンラインで結べるように、気軽に図書館を利用できるようになればいい。

小学校の国語の授業の中に「図書室の使い方」という単元があり、それぞれの担任が自分の学校の図書室の使い方を教えている。それを近くの図書館とオンラインで結んで図書館の方に教えてもらうようなこともできるかと思う。

本校は立町であるが、すぐそこにメディアテークの図書館があり、道路を隔てて行ける。図書館そのものに対する親しみや、ダイレクトに自分が学んでいけるので、学校以外の図書館に対する敷居が低くなるかと思う。

それから、参考資料「令和２年度　仙台市図書館利用者からのご意見」に不登校の子の受入れをしてほしいとあった。確かに、家で本を読んでいる時間も授業としてカウントできるのであれば、図書室で過ごした時間あるいはオンラインで図書室でやり取りしたことも授業と認めることが今後できたら、居場所づくりにもなるかと思う。

逆に、アナログの部分を見ると、わざわざ図書館に足を運び、自分で本を取って活字を見て過ごす場と時間の、心の豊かさみたいなところも子どもたちには五感で感じ取ってほしい。「本を読むのって楽しい」とか、「図書館に行くってこんなふうに充実感を味わえるのね」みたいな、積み重ねも必要かと思った。

子どもに何ができるかと思ったが、子どもにボランティアで何かしてあげるのではなく、子どもをボランティアにしてしまう。夏休みの体験授業みたいに子どもが図書室でボランティアをしてみるとか、図書室の仕組みを体験してみるとか、楽学プロジェクトみたいなもので図書館に行くとか。また、学校の中での委員会活動のように、子どもたちが手づくりのしおりを作ってみたり、自分のお勧めの本を絵で紹介したりということを図書館でやってみるとか。自分の手づくりのしおりを市民の方が

手に取って喜ばれていたり、自分の書いたお勧めの本が飾ってあったりするなど、直接文字ではないが図書館自体に親しみを子どもたちが覚えられるような、そういう取り組みができるのではないかと思った。

議　　長　市民図書館と立町小学校をオンラインでつなぐような連携みたいなものをなさらないか。やはりどこかで事例をつくらないといつまでもできない。

滝川真智子委員　ぜひやってみたい。

議　　長　モデルケースとして、教育機関と生涯学習の方をどうつないでいくかというのは大きな課題である。やがて中学校に入るとかなり忙しくなって、子どもたちは読書数が減ってくるし、小学校の段階でどういうふうに習慣づけて育てていくかはすごく大事だと思うので、その辺のところを、もし可能な範囲でやれるのであれば面白い。

滝川真智子委員　前任校の話だが、見学や「自分づくり」でのコースなどいろいろなところでオンラインをしていたことがある。図書館でもできると思うが、今は電波の環境があまり良くないのがネックとなっている。それぞれの施設の環境にもよるところかと思うが、ぜひやってみたいと思う。

議　　長　幸いにも地理的に非常に近い。

事　務　局　図書館の利用が好きなお子さんについては、中高生の方に選書サポーターをお願いするなど、主体的な活動にご参加いただける機会をつくる試みはあるが、それをさらに広げるような発想でのご提案かと思う。今後検討したい。

滝川真智子委員　近くの図書館というか、そういうイメージで親しみを持っていけばいいかと思う。

議　　長　何か新しいことを行うときに、特定の学校と理解のある先生を通して結びつきを深めていかないとなかなか事例をつくるのは難しく、ご理解がある先生がいらっしゃる学校のほうが行きやすいかと思う。

真壁直人委員　中学校でも、図書館に行って静かな環境の中で本を手に取って見るということは、ぜひ子どもたちにやらせたい。うちの学校の図書館は司書が積極的にいろいろなことをやっていて、学校の規模にしては蔵書は多いほうかと思う。

その中で、本から広がる世界について、ウェブサイトなどでどう調べていくかということをやっている。手に取って本を読んだときに、このあたりどうなっているんだろうとか、同じ作者やジャンルで検索してみるなど、関連づけた調べ方、こんな調べ方があるということをぜひ図書館でやってほしい。地元の歴史とか、昔ここに道路が通っていたとか、意外と検索しても出てこないが、地元の書店に行くと地元の本がそろっている。そういうデータ同士がつながっていって世界が広がっていく、ハイブリッドな図書館の利用法をぜひ図書館で広めてもらいたい。

私は立町小学校出身であるが、なぜ本が好きになったかというと、近くに市民図書館があった。ほぼ毎日市民図書館に入り浸って、そういう環境がすごく自分を育てたと思っている。

確かに電子図書は前に私も提案させていただいたので、それは進んできたかなとは思うが、逆にアナログな本を借りた後の深め方を、いかにして各図書館がウェブサイトなどで補助していけるかということをぜひやっていってもらえれば、双方で広

がりが出てくるのかと思った。

議　　長　学校側の各教科で指導された、あるいは教科を超えた読書で指導されてきたこととそのニーズが、図書館側に伝わりにくい。だから小学校と中学校の先生が委員としておいでいただいているのだと思うが、今教育現場でこういうことが必要だということがうまく伝わればと思う。

真壁直人委員　一般の人でも、この本と関連がある本が何冊か紹介されるとか、その人の興味関心を引っ張るものが出てくれば。ネット通販などで物を買うと、次に自分に興味のあるものが出てきて、結局また買ってしまうという連鎖を繰り返すことがあるが、それが本を通してできればすごく素敵だなと思った。そういう工夫があればありがたい。

議　　長　レファレンスサービスの活用なんかはちょっと関連してくる。

杉山秀子委員　保育現場で仕事をしているので、子どもたちの本への興味を最初に示すのは、やはり親であり私たちのような保育の現場にいる者かと思う。そうすると、子どもたちに最初に触れさせたいのはやはり生（なま）の本である。私の尊敬する先生が、子どもたちは本を開かなくてもいい、図書館に行って本のシャワーを浴びるだけで本に興味が持たれるんですよと言っていたのを、私はすごく心にとめていた。

うちの保育園でも図書コーナーがあって、実は市民図書館をまねて絵本の貸出カードを作った。それは４歳児と５歳児が持てることになっているが、絵本カードが１個あると本の貸出しがものすごく多くなる。自分で借りたい本を書く、あるいは保護者の方に書いてもらうというふうにしてやっているが、そこから今、５歳児がお勧めの本を紙に書いて貼っておくことをやっていたりする。

そう考えると、子どもたちが生の本を小さいときにどのくらい親とか周りの人とかから手渡されるかが問題だ。そうなると、電子図書にも興味が持てるだろうし、大きくなっていろいろなことに興味が持てるのではないかと思う。

荒井にある私の保育園の保護者の方にもどんな本がいいかと聞かれ、若林図書館に行っていっぱい本を借りたらと言ったら、若林図書館まで行くのは遠いと言う。仙台市内に大きな図書館はあるが、徒歩や自転車で行けるところに小さい図書館がもっと増えると、小さいお子さんを持ったお母さんなども行きやすいのではないか。地元の例えば家庭文庫で今まで本を借りたり、そこでお話し会に参加するなど、そういう恩恵があった人たちが、今コロナになってお話し会とか文庫をなかなか使えない状況があったりもする。かなり財政も厳しくなっているということで、図書館をこれ以上増やすのは難しいと思うが、大きい図書館ではなく小さい図書館がもっと地元にあると、より図書館というのが身近になって、ここで揃わない本は大きい図書館に行くといいよ、泉の図書館に行くとこんな本がもっとあるよと言うと、じゃあ行ってみようかということにもつながるのかなと思う。

そういう意味では、身近に子どもがすぐ手に取れる本があったら、もっと子どもたちは本に親しめる機会が多くなるのではないかと、日々仕事をしながら感じる。職員にはいつでもいいから絵本を読んであげてと、設定保育の中じゃなくてもいい、朝来て本を持ってきたら１対１で本を読んであげてというのをずっとやっている。私た

ち大人が子どもたちにどのように本を提供するかということは、アナログでも電子図書でも一番の基本になるかと思う。

跡部裕史委員　私もアナログではあるが、電子図書館というのはすごく可能性を秘めていると思う。例えば図書館の登録者の対人口比はすごく低いので、市民のほとんどは登録されていない。そういった、今まで図書館にあまり足を運ばない人たちにも興味を持たせるという意味で、すごく可能性があると思う。そういう方策を考えてほしい。

そのために重要なのはコンテンツだと思うが、どういうふうにしてコンテンツを特徴づけるというか、抽出させるというか、今の現段階で何かコンテンツについて考えていることがあるか。

事務局　まずは電子図書館というものについて、セキュリティとかライセンスの問題とか、仕組みについてきちんとしていかなければならないため、そういった点について検討している最中である。

コンテンツはもちろん一番重要なところであるが、そこの部分は今年度中に幾つかコンテンツを入れて、徐々にコンテンツを増やしていこうという考え方でいる。

コンテンツの内容については、図書館の資料の収集方針のようなさまざまな規定があるので、それらに則りながら、どういったコンテンツを入れるのが紙の図書とすみ分けをしながら一番望ましいのかというのも、検討しているところである。

電子図書についてさまざまなご意見をいただく中で、紙の本の良さというもの、あるいは紙の本と電子図書の使い方というようなことのご意見もいただいたところであるので、それらを踏まえてどんなコンテンツを入れていくか、さらに検討したいと考えている。

小林直之委員　今回の第三次の振興計画は令和８年度までということだが、令和８年というと震災から 15 年を迎える年だ。振興計画の中から東日本大震災とか震災という言葉がなくなってしまって、前回の協議会でも報告があったが、若干さみしさを感じるというか、これでいいのだろうかということを考える。せっかく立派な震災文庫が市民図書館の中にも出来上がっているし、集める 10 年が終わった後に、これから震災文庫を生かす５年、10 年というところが始まっていくのではないか。この東日本大震災について、書籍は記録ということでは何よりも優れていると思うので、それをたくさん持っている図書館が、震災というものをこれから５年、10 年、どのように捉えていくのかというところも、何か方針として示していければと考える。

電子書籍について、導入するシステムは何を考えているか。

事務局　まだ決定していない。

小林直之委員　大体のイメージは。

事務局　システムとして、個人情報は扱わないという方向で考えており、さらに外部委託審査をどのような形で進めていくかというところを検討しているので、整理が整えば委員の皆様には内容についてもお知らせできる。

小林直之委員　資料に浜松や熊本が事例として挙がっているが、同じシステムになるのか。

事務局　事例で挙げているのは、図書館システムと連携しているか非連携型かというとこ

ろで、非連携型の事例である。

今回は非連携型に導入が決定しているが、それは仙台市図書館のホームページにアイコンだけが１つあり、そこをクリックすると別のクラウドに行って、そちらで検索をして図書を借りるというシステムになっている。

連携型については、利用しやすい面もあるかとは思う。例えば札幌市図書館のホームページでは、連携型の電子図書館がご覧いただける。

小林直之委員　そのシステムは業界でも多分最大手で、選書について非常にしっかり整っており、公共図書館の電子図書館は約９割がそのシステムだという話を聞いたりするので、そこであればある程度コンテンツ選びの自由は効くと思う。

先ほど選書のことが話題になったが、例えば仙台市図書館の電子図書館であれば、震災関連のものを電子化した書籍をたくさんそろえておくとか、あるいは郷土資料に特化するであるとか、もしくは小学校、中学校と連携することを求めるのであれば、調べ学習ができるような図書であるとか、何らかの方針、方向性を電子図書館の中で立てておくと、非常に個性的になるし、仙台市が何をやるために電子図書館を導入したのかしっかり説明がつくと思うので、そこを踏まえることが大事ではないかと考える。

いわば何をサービスするかだと思うが、非来館型というとどこの図書館もそう言って今電子図書館を導入しているので、理念のようなものを立ててもよろしいのではないか。

ＳＤＧｓについては、仙台市が未来都市になっているということもあるが、おそらく４番目のゴールを象徴する施設が図書館だと思う。公共図書館が誰もが利用でき、生涯教育のシステムもあるということであれば、これは本の展示で十分表現できる。４、11、17 に限らず、例えば今月は１番、来月は２番といった形でコーナーを設けたりしていくと、仙台市全体で未来都市としての活動の中で図書館にそういったコーナーを設けています、毎月、それぞれの目標、ゴールについての選書をしていますという形で、非常に分かりやすく図書館の力をアピールできるのではないかと思う。

小野寺利裕委員　外国の多くの方から利用していただければいいと思っているので、外国語の資料の整備状況について教えていただきたい。

事務局　各図書館それぞれ洋書コーナーという本棚を設けている。数は多くはないが、毎年少しずつ増やしてはいる。

小野寺利裕委員　今、震災の話が出てきたが、やはり、震災関連でかなり外国の方々が仙台を訪れる機会が多く、外国語の資料、震災関連の資料などを紹介できるとよりいいと思う。外国の方々も多くの方々が利用できるような、そういう図書館を目指していただきたい。

議長　ほかよろしいか。

各委員　特になし。

６　閉会